
クソつまらないプライドと共に生きていく！

kuroriko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クソつまらないプライドと共に生きていく！

【Nコード】

N5806T

【作者名】

kuroriko

【あらすじ】

「男として格好悪い所は見せたくない」というクソつまらないプライドを持った男と「ツンデレ」ツン要素が高めの女と「クールビィーティィー」な印象を放つ女……三人が異世界へトリップした。ラブコメファンタジーストーリー。

人間はプライドの一つや二つは持っている。俺はそう思っている。人間の価値はプライド一つで大きく変わる。……『この世界で生きていく』俺は二人の女の子とそう誓い合った。

1 異世界生活スタート（前書き）

一話目は説明が多めです。汗

二、三話読んで気に入ってもらえると嬉しい限りです。

1 異世界生活スタート

「男として格好悪いところを見られたくない」こんなクソみたいなプライドを俺は持っている。人間ならプライドの一つや二つあるのではないだろうか？ ここだけは譲れない。というプライド一つで人間の価値は大きく変わってくる。そのプライドがクソなほど人間としての価値はどん底まで評価が落ちることだってありうる。プライドがない人間なんていうのはいないのではないのだろうか。他人に暴言を吐かれた時、心の中では激しい葛藤や怒りがこみ上げてくるだろう。心のどこかには自分の知らない人間のプライドというものが存在している。俺はそう思っている。

男・女なんて関係ない。誰もが譲れないプライドを持っている。

『この世界で生きていく』俺は二人の女の子とそう誓い合った。

「んで、どつちにすんだよ。あ？ 剣か？ 銃か？ 早く選べよ」

目の前にいる、身長が高く体格が良い20台前半の男、特徴的な赤いメッシュを入れた短髪にしているヤンキーのような男が古びた長机を叩きながら切れ気味に脅してくる。……そんな怒らないでく

れ。ほら、隣の女の子も泣きそうなんですけど……。

隣の女の子、制服を着ているたぶん高校生……いや女子高校生。この違いは果てしなくでかい。平均身長くらいの身長で、シャンプーの良い香りを放っている腰あたりまでのストレートの長い黒髪。目は二重でどことなくキツそうなイメージを放っている。世間では「ツン」っぽいと言われるのだろう。誰もが一度は凝視してしまうだろう。というくらいの美少女だ。でも、残念なことに今は泣きそうな顔をしている。キツそうな顔からは涙が零れないように必死に耐えているようにみえる。

「な、何見てるの」

視線に気が付いた女の子がこちらをキツと睨みつける。……「ツン」だコレは絶対。

「あ、いや、なんでもない」

俺は慌てて視線を目の前のヤンキー男に向ける。

「あ？ イチャイチャしてんじゃねえよ。んでどっちなんだよ。俺が決めちまうぞ」

ヤンキーは勝手に決めようとして、腕を組み考え始めた。

俺は、はあく〜と深いため息をついた。……なんでこうなったんだろ。良く考えよう。状況整理しないと俺は夢の中だっと思ってしまったままになってしまう。

良く考えろ、今日はゴールデンウィークも明け、中間テストも終わり、その週末金曜日。そうだ、遠足の予定だった。バスに乗って友達と騒いでいた。ここまでは覚えている。そして、目的地のパーベキュー場のある自然公園へと向かっていたはずだ。そこで俺は騒ぎ疲れたのもあり、バスの中で少々寝ることにした。「テンション高く遊ぶために寝る」と友達に言うのと皆一斉に寝始めたのも覚えて

いる。よし、ここからだ良く考える。

…………… ああ、間違いなく起きたら俺は森にいたよ。それも美しい木々が生い茂る妖精でも任んでるの？ ってくらい綺麗な森だった。しかも面識のない美少女付きという。俺への誕生日プレゼントなら間違いなく生涯生きてきて一番嬉しいプレゼントとなっただろう。その夢も一回の会話で覚める事になってしまったんだけど。

彼女は体を起こしながら、眼を擦りながら周りをキョロキョロと見渡してた。

「……………？ ここどこ？」

その一言だけで夢から覚めた。彼女も何も知らない。俺と同じで目が覚めたら森の中だ。

「分かんない」

俺はどう言えば良いか分からず、短く素っ気なく答えてしまった。すると彼女はびくつと体を震わせた。

「は、はいっ！？ え……………だ、誰ですか？」

人がいるとは思わなかったのだろう。

彼女の美しい瞳が俺を見据える。

「え……………つとあなたと同じく迷子です」

俺はできるだけ冷静に紳士らしく答えた。無駄に紳士らしく。するとなぜか、彼女はか弱い腕で自分の体を抱きしめるようにして体を震わせている。

「あ、え！？ なんで！？ 違う違う！ 何にもしないから！」

彼女は何も答えずにずっと俯いていた。その姿を見て俺はどうして良いのか分からなくなった。男として助けてあげたい。でも俺にもなぜここにいるのか分からない。明らかにここは普通とは違う雰囲気を感じ出している。一切人の声が聞こえることなく、風が通り

抜ける音さえ聞こえない。

外にいてここまで静かな所に着たのは初めての経験だった。

数十分の間二人は言葉を交わさず座り込んでいた。彼女も今では顔を引き締め、自分に渴を入れたように見える。

それを見て俺は立ち上がった。

「あのさ、ここにいても仕方がないから少し動かないか？」

すると無言で彼女も立ち上がった。

立ち上がると俺の目を睨み言った。

「か、勘違いしないでよね。こ、怖いとかじゃないんだからね」

彼女は言い終わると顔を逸らした。時間が経ち同じくらい年齢だと分かったのか、敬語じゃなくなっていた。

俺もなんだか、気まずい雰囲気になったので前を向いて歩き始めた。彼女は十歩後ろくらいをついてきた。……もう少し近づいても良いんじゃないかな……。

良く良く思い出すと間違いなく彼女は「ツン」じゃないか!!

そんな事を思い出して顔をにやけさせていると、彼女がそれに気がついた。

「っ!? な、なんて顔してるの?」

完全に顔が引きつっていた。さっきまで涙を堪えていた顔が今では、完全に「コイツヤバイ」って顔に変わっている。

俺は咳払いを一度し、無言で顔を元に戻す。

ちなみに冒頭はそんな感じ。なんでこのヤンキーみたいなのに絡まれているかというところ。

あの後、森を数分歩いていると、このヤンキーが奥の茂みから現

れた。

「……お？ 新入りか……お前等付いて来い」

と言われ、俺の腕を引つ張り無理やり連衡された。俺は連れ去られる！？ と思ひ必死に抵抗したのだが「うるせえな！ 取って食ったりしねえから安心しろや！」と凄まれ黙り込んだ。彼女は一瞬どうすれば良いのか困ったような表情をしたが無言で付いてきた。

十分くらい歩くと、森の中に、古びた木でできた赤い屋根の少し大きめのペンションみたいな建物の中に連れ込まれた。

中に入ると、食堂らしき所に連れてこられた。……ヤンキーを見て疑問に思っていたのだが、なぜRPGの中に出てきそうなキャラクターのコスプレをしているのだろう。このヤンキーは盗賊みたいな服装をしている。外見にピッタリ似合っていてあまり違和感がないので第一印象ではあまり気にならなかった。そしてペンションの中にもコスプレをした人達がいた。なんだか格闘家みたいな格好の人や、袴を着て腰に剣の鞘が差し込まれている人だとか。ざっと見ただけでも20人近くはいる。あちこちで「高校生？」などと聞こえてくる。中は意外と広く20人近くいても狭いとは全く感じないほどだった。

多くの長机がありその上には、見るからに美しい色のしたチキンやドでかいピザなど見るからに豪華な料理がバイキング形式に並べられている。古い建物と豪華な料理とのギャップが凄い。

「ここが俺達のギルドだ。質問の前にお前等、自分の武器を選べ」と、そんな訳でここまでの記憶は覚えている。

目の前に物騒な物を出され、しかも選べって……そりゃ言葉も無くなります。……どんな状況でも異能の力でも打ち消す右腕でもあれば話は簡単なんだけど……。あ、あと未来型ネコ型ロボットとか。

1 異世界生活スタート（後書き）

次の話からはもっとテンポの良い会話を多く混ぜたいと思います。
一話目が一番難しいです……説明が多くなってしまい。申し訳ない
です。汗

最後になりましたが、ここまで読んでくださった皆様ありがとうございます！
ございました！！

2 覚悟

武器を選べと一生で二度も聞かれないう質問をされていた。俺は目の前の、剣と銃を見据える。刀身も長くRPGに出てくる剣みたいな見た目の剣。黒色の小さいが重みのありそうな銃。どちらともゲームの画面とは全く違う生身の質圧を感じる。人くらいなら簡単に命を奪えてしまえるのではないだろう。俺は内心すくくびびっていた。恐い恐い恐い恐い。吐き気が込み上げてくる。だが、一切顔には出さない。隣の女の子も不安だろう。恐いだろう。それなのに男の俺が恐さを表に出してはいけないというクソつまらないプライドだけで耐えていた。

「びびつてのか？ ……そりゃあ、仕方ねーよな。誰だつてはじめはそんなもんだ」

ヤンキーは落ち着いた口調で同情するような声音で言った。今までのような威圧的な感じは一切なくなっていた。

二人は何も口に出さない。 ……声が震えてしまうから ……そんな姿は誰にも見られたくない。

ヤンキーはまた威圧的な感じ ……いや、もっと真剣に彼は語った。「だが、一つだけ事実がある。 ……お前等はもうここからは出られない。 ……いや違うな。少なくともここからは当分出ることはできない。生きていくためには戦うしかない。そのための武器だ。悩むのは無理もないがお前等だけが不幸だと思うな。ここにいる奴等は皆、お前等と同じだ。 ……皆何も分からない。ここがどこなのかもだ」

彼は一切目を逸らさずに夢のような、だが厳しすぎる現実を突きつけた。

これを聞いてまた俺は頭がパニックになった。 ……生きていくには戦うしかない！？ ここから出られない！？ こいつ等も同じだ

？ どういうことだ？ ここはどこだ！ お願いだ帰してくれ！
意味が分からない。……俺は遠足に行くはずだったんだよ……！
………てか、そんな重要な武器ならアンタ勝手に選ぼうとしてんな……。

その時、隣の彼女が後ろに倒れていくのが分かった。俺はパニッ
クになった頭の中でスローモーションでその光景が映った。一瞬自
分が倒れたのかと錯覚した。

彼女は過呼吸のように呼吸が速くなっていて、意識が朦朧として
いるようだった。

俺はそんな彼女を見ても動く事ができない。頭では少しずつ、彼
女の元に駆け寄れ！ 早く動け！ と偽善者気取りも良い所の事を
考えているのに、行動に移すことができない。

「お前、女を担いでちよつと付いてこい」

慣れているのだろうか、彼はまたかと言うようにふうと息を大き
く吐き出し、「武器はまた明日選べ」と付け足した。

俺はその言葉を理解するのにたっぷりと5秒を費やした。

彼女を担いでいる時には頭の中は除々に正気を取り戻していた。
その証拠に担いでいる時に背中に感じる大きすぎずといって小さす
ぎない柔らかいながらも弾力のある二つの丘に俺は、胸を躍らせて
いた。

ペンション内二階の角部屋に案内された。

「ここがお前等の部屋だ。明日起きたら今までの食堂に來い」

扉の前でそれだけ言うと彼は踵を返して、帰っていきこうとする。

「はえ！？ おい、待て！ マズイだろ普通に！」

彼はめんどくさそうな声を出して、ゆっくりと振り返った。

「んだよ。良いじゃねえか、イチヤイチヤしてればよ。部屋数も限
られてんだ。当分の間はお前等ペアだ。丁度良いじゃねえかよ」

そう言うと、再び踵を返し手をひらひらと振りながら消えていっ

た。

マズイ、非常にマズイ！ いやかなりのプレゼントだけれど！
それもこの状況じゃなかったらもつと嬉しい！ そんな事を考えて
いた俺は、彼女の荒い呼吸を聞いて我に返った。

とりあえず、彼女を横にしてあげようと思い。角部屋の扉を開い
た。

部屋の中は、思っていたよりも全然広くLDKという間取りに
なっていた。

ベッドやクローゼットそれに、包丁やまな板など料理器具まで備
え付けられていた。ここに向かってる時に彼は「ある程度の物は揃
ってっから」と言っていたがここまで揃っているとは思っていなか
った。

「広っ！ ホテルよりも豪華な所だな。洋室まであるし……どう
なってたんだ、ここ」

一人でぶつぶつとしゃべっていると背中から首筋に彼女の吐息が
かかり、すぐにベッドへと向かう。

彼女を12畳くらいある洋室にあるダブルベッドの横に寝かせる
と彼女の呼吸は次第に落ち着きを取り戻していった。

『俺は男だ。格好悪いところだけは絶対に見せたくない』とクソ
つまらないプライドがまた脳を埋め尽くした。

怖い怖い怖い……よし、これで『怖い』って思うのは最
後だ。

どつやら俺は武器を選ばなければいけないらしい、だがどつちに
する？ やはり、銃か？ 遠距離からも打て本当に危険なら剣より
は間違いなくリスクは少ないだろう。

でも、彼女は？ 彼は言っていた。「当分の間、お前等はペアだ」

とその言葉を意味するのはもしかしたら彼女と一緒に危険な事をさせられるかもしれない。そしたら、俺は剣で前にいた方が彼女のリスクは少なくなるだろう。……………決めた。俺は剣を選ぶ。彼女にリスクを負わせるわけにはいかない。男として。

クソつまらないプライドだろう。偽善者気取りも良いところだろう。だが、気が付いた時にはもうこのプライドと共に生きてきたんだ。これからもずっとこのクソつまらないプライドと共に生きていくだろう。だが俺は心の中で全然構わないとさえ思っていた。

小学校低学年の時、俺はイジメを受けていた。その時にはもうクソつまらないプライドを持っていた。数人から靴を隠されたり、暴力を受けてきた。その時の俺は力でしか解決法が分からなかった。『格好悪いところを見せたくない』と思ひ。脳がクソつまらないプライドで埋まった時、クラスメイト数名は皆泣いていた。顔が明らかに腫れている子や唇から血を流している子もいた。小学生程度の力では大事にはならなかったが、この事件がキツカケで俺はさらに強くこのクソつまらないプライドを持つようになっていった。

最初の頃は自分を抑えられないのが嫌いで、格好悪くても良いじゃないか！ などと思っていた時期もあった。だが少しずつ抑えられるようになってきた時にはこのプライドは俺の生き方だという思いに変わっていった。

真剣に武器の事などを考え終わり、部屋を搜索していると彼女が目覚ました。

「大丈夫か？ 辛いならもう少し寝てろよ」

彼女はジトーとした目でこちらを見ている。

「だ、大丈夫よ……ところで……なんであなたは私と同じ部屋にいるの？」

彼女の声のトーンは低い。これ以上彼女に引かれたら一緒に部屋

で生活なんてできない！ と思った俺は、ベッドの前の机の下にあるイスに座り素直にできるだけ丁寧に説明を始める。

「っ！？ ってことは私とあなたはど、同棲するってこと!？」

彼女は、バツと羽毛布団を胸元まで引き寄せた。

「変な言い方すんな！ ま、まあ、そうゆうことだ」

「これは夢!？」などと喚いている彼女を無視して、俺はより良い関係を築くために自己紹介を無理やりすることに決定した。

「えーっと、俺の名前は 天宮 陸」

彼女は、へ？ って顔をしていた、そりゃあ、無理もない唐突に自己紹介始める奴がいるんだもん。俺だってそんな感じの顔するよ。

「へ？ え？ あー……」

彼女はコホンとわざとらしく咳払いを一つし言葉を続ける。

「私の名前は 春海 椿」

なんだが、今すぐにもでも咲きそうだな。と意味の分からない感想を抱きつつ、彼女が素直に自己紹介をしてくれた事に嬉しさを隠しきれない。

「な、何!？ 名前を聞いてニヤけてるのよ!？」

彼女おろおろとし始め、問い詰めてくる。

「いや、なんでもない。気にしないで」

彼女は「気になるのよ!」と言っていたが、俺はこの後言わなくてはいけないことがあるのでまた話をぶった切った。

「椿さん」

「何名前と呼んでるのよ！苗字で呼びなさい!」

出鼻を挫かれた。真剣な感じだったのにまさかの突っ込み。しかも地味に傷つく……。

咳払い一つして仕切りなおした。

「春海さん…… 武器の事なんだけど、銃を選んでくれ。俺は剣を選

ぶ

言うと椿の表情は明らかに硬くなった。不安だし、恐いのは十分に分かってる。それでも俺は伝えた。生きていくためには選ぶしかないと言った。あの雰囲気は嘘は言っていない。それはすぐに分かったからこそ俺は真剣に椿に伝えた。

椿は数分黙り込んだまま口を開かなかったが、やっと口を開いた。「……なんであなたは銃を選べなんて言うの？」

椿は力のない目で俺を見据えた。そんな儂げで弱々しい彼女を見て俺のクソつまらないプライドが少しだけ顔を出した。

俺はその瞳をしっかりと見つめ言葉を発する。

「剣よりも銃の方がどう考えても安全だからだ。……俺は春海さんを守りたい」

余計なことまで口がすべり言ってしまった。……あんな目で見られたら男なら反応しちまうって……。

「っ！？ え！？ そ、そんな事！ 急に言われても……」

椿は顔を真っ赤にして慌てている。俺まで顔を赤くなってきた。

「ち、違う！ お、男として守りたいってことで！」

「はえ！？ そ、それって……プロポーズ……？」

椿はさらに顔を赤くし、羽毛布団の中に潜り込んだ。

その中から声が聞こえた。

「だ、駄目！ 少しだけ考えさせて！」

「は、はい」

俺は頭が真っ白になってしまい。咄嗟に返事をしてしまった。弁解をもう一度試みようと思ったのだが……か、考えてくださるのか……とか思ってしまったこれ以上は弁解しない事にした。

その後、そこに座っていると椿から「ね、眠たいから部屋から出て行って！」と言われ俺はダイニングへと向かい。そこにあった白

いソファで睡眠を取ることに決めた。

朝起きると、腹が空腹の声を漏らしていた。こんな状況でありながら人間ってやつは正直だなとか思いながら椿の様子を見に洋室へと向かった。

部屋に入ると石鹸の良い香りが部屋に充満していた。椿はもう起きて、なぜか濡れている髪をタオルで拭いていた。

「なんで髪濡れてんの？」

「あんまりジロジロ見ないでよ……こんな状況なのに人間ってのは正直よね。お風呂に入りたくなるんだもん」

プイと顔を逸らしながら言った。

着替えはなかったが俺もシャワーを浴びたあと、朝食を食べに行こうと椿を誘い食堂へと向かった。

食堂へ行くと、昨夜みたいに人は多くはなかったが数人いた。

昨夜みたいにバイキング形式にパンやサラダやコーンスープなど色々な料理が並べてあった。これを勝手に食べて良いものと悩んでいると、後ろから声をかけられた。

振り向くと、そこにいたのは昨日のヤンキー……じゃない彼だった。眠たそうな顔で「思ってたよりも早く起きたな。……ああ、好みに食べれば良いぞ」と言いトレイを二人に渡し、先に料理を取り始めた。

俺はライ麦パン二つに味噌汁それにサラダを取った。椿には「変な組み合わせね……」となぜか言われ、少々傷ついていたり……。

椿は、クロワッサン二つにコーヒーを選んでいた。

選り終え、二人は彼が座っている長机へと向かった。ちなみに彼の朝食はカレーパンにクロワッサン二つに味噌汁といった俺と仲間

意識が芽生えそうな感じのチヨイスだった。横で椿が「ありえない……」と漏らしていたようにも聞こえたが俺には聞こえない。

二人は彼の真向かいの席に腰を下ろした。彼は二人を見上げ、面倒くさそうに声を発した。

「あ？　なんだ？……覚悟できたみたいだな。お前等良い眼してるじゃねえか」

ふんと彼は鼻を鳴らした。

「んで武器はどうすんだ？」

二人は即答した。

「剣だ」「銃で」

彼はそれを聞いて、「ああ、分かった」と短い返事をする、食事を再開し始めた。

俺はなんとなくだが、椿が銃を選んでくれることを信じていた。

なんで選んでくれたのかは分からないが……もしかしたら本当に俺の恥ずかしい台詞を聞いて選んでくれたのかもしれないと思うと自然に顔が綻んだ。

食事を再開していた彼が思い出したように「あ」と声を漏らし言った。

「お前等、明日から学校行って来い」

「は？」「へ？」

俺と椿は二人して、言葉を理解できなかった。

学校なんてあんなのか！？ …… 本当にここどこなんだ……。

2 覚悟（後書き）

ヒロインは二名を予定しております。

三話目に出てくる予定です。

ここまで読んでくださった皆様ありがとうございました！

3 萌えポイント

「生きていくためにはとか言ったが、真実を言うのだな。……この世界で死んだ奴は俺は知らない」

『彼』改め『ヤンキー』は「すまん。大袈裟に言っただけで、足して、気まずそうに苦笑している。」

「は？ どういうことだ？ ってことは戦わないのか？」

俺は少しの期待を持ちヤンキーに質問を投げかける。

「あー……戦うな。だが、この世界ではなぜかは知らねえけど過度な痛みを感じることがない。噂ではある程度のダメージを受けるとポリゴン片となって消えるらしいが、俺は見たことがないから真実は知らねえ。しかも戦うって言うってもお前等はまずは学校だ。戦い方ってのを学んで来い」

ヤンキーは重要な説明を本当にどうでも良いように言い放った。その言い草を聞いて俺は少しだけ安心した。もしかしたらヤンキーは不安にさせないようにこんな軽く言っているのかもしれないと思う。

「お前等はあの状況下で少しの時間を与えただけで武器を選べたんだ。自信を持っていいぞ。普通の奴なら一週間は引きこもるからな……」

「……うちお前等は一日も引きこもらなかったな」

なぜかクソとか言ってる……やはり、ヤンキーに優しさはないと改めて思い直した。

椿が「そういうえば」と言い質問をする。

「学校ってどういう事なんですか？」

ヤンキーは「ああ、めんどくせえ」と言い放ち、朝食を食べている手を止め手を下から上に振り上げると、映画やアニメ等で良く見かける、空中にウインドらしきものが出てきた。

「っ！？ 何だよそれ！？」

「え！？ な、何それ！？」

俺と椿は二人して驚きの声を漏らした。

「つち、つつせえな。学校で習え」

と短く言い放ち、ウインドを操作してなにやらメールを送っているようだった。

その後聞きたいことが色々増えたのだが質問するとヤンキーは明らかに不機嫌になっていくので二人は黙って食事を再開することに。

5分ほど経つと後ろから声をかけられた。

「……おはようございます」

小さい声だが透き通る声。

後ろを振り返ると、目を引く美しい金色のボブカットの髪、身長は平均身長よりも低い、二重の目が眠たそうに見える。鼻もスラッと高く……美少女なのは間違いないだろう。全体的にクールな印象を放っている。

そして制服を着ていた。それもコスプレっぽくなく、まともな制服のように見える。

隣で椿は「わぁー……キレイな金髪……」と声を漏らしていた。

「おっす、相変わらず眠たそうな顔しやがって」

ヤンキーは片手を挙げ挨拶をし、言葉を続ける。

「リコ、こいつ等が新しく学校に行くことになった二人だ。年も近そうだし仲良くやれよ」

流れからして『リコ』とは彼女の名前だろう。たしかに年も近そうに見える。

彼女は俺と椿の顔を交互に見て、ぺこりと頭を下げ、自己紹介を始める。

「私の名前は 鈴音 リコ」

俺と椿も自己紹介をし、明日から行く学校の説明を受けた。その間にヤンキーは食事を終え「後は任せた」と言い残し、どこかへ消えた。

その後二人で食事を摂りながら色々話を聞いた。

ここはどこなのか？ 「分からない」 死ぬことはないのか？

「分からない」

いつになったら出ることが出来る？ 「分からない」 …… 椿の胸のカップは？ 「制服越しだから正確には分からないけどDカップくらいだと思う」

「ふぐつ！！」

俺は顔を真っ赤にした椿から腹に綺麗な右ストレートを入れられた。

「ふざけてるの？ …… 天宮君の事少しでも格好良いと思った私がバカだったわ」

物凄く痛かった。なんだ？ 過度な痛みってどのくらいからなんだよ！？ と心の中で突っ込みながら腹の辺りを押さえ浅い呼吸をしながらも、とても恐いトーンで問い詰められた時は聞こえたのだが、後半の言葉は囁くように言っていたので聞き取ることができなかった。

後はお互いの事を話し合った。俺と椿は高校二年生で、リコは一つ下の高校一年生らしい。

食事を終え、リコは立ち上がりトレイを持ち上げ、ヤンキーと同じようにウインドを出し時計を見る。

「私そろそろ学校行ってくる」

そう言い残すとトレイに乗せた食器を持って食堂内にあるカウンターへと向かって行った。クールビューティーという言葉が非常に似合う少女だった。

俺と椿も既に食べ終わっていたので、同じようにカウンターへ食器を持っていき自室へと戻った。と言っても戻っても今日一日はすることがない。どうしたもんか……。

二人は洋室にいた。椿はダブルベッドに腰をかけ、俺は………フロアリングに直で正座していた。地味に痛い。「ねえ、天宮君。あの場所であんな事を聞くのはマナーに欠けると思わない？」

誰もが可愛いと思うだろうと思うんじゃないかと思つ笑顔で質問を投げ込んでくる。

俺はどうか打ち返すべく打席へと立つ。

「あんなこととは？」

まずは一つとぼけてみた。1ストライク。

「んなつ……とぼけるつもりね。……そ、それなら良いわ」

何気に効いたらしい。1ストライク1ボール。

コホンと咳払いを一つしたあとにベッドから下り、俺の近くまで来てフロアリングに腰を下ろす。

そして、上目遣いで顔を覗き込んで言う。

「天宮君の事格好良いと思つた私がバカだったの？」

もうこの時点で俺は打ち返せないと分かり自分から死球デッドボールに向かつていった。

この女、絶対モテるだろ……これでモテなかったら日本という国はホモばかりだろう。

「すみません。大好きです。結婚してください」

俺はホモじゃないからね！ そりゃあ、真つ直ぐに目を見て言つたよ！ もう即決だつたよ！

「ば、バカ。そ、そんなに本気にしないでよ！」

椿は顔を真つ赤にしてプイと顔を背ける。

俺は「無茶苦茶良い感じじゃね？」などとチャラ男みたいな事を思いながら顔には出さないよう内心でガッツポーズをしていた。

その後、椿が「服、洗濯したいから換えの洋服借りてこれないか

誰かに聞いてくるわね」と言ったので、俺も付いていくと言うとまたしても睨まれ「し、下着とかも借りるかもしれないからだめよ」と言われてしまったので俺は大人しく椿に着替えを任せ、留守番をしていた。

一時間ほど経つと椿は両手にパンパンに膨らんだ二つの大きな袋を持って戻ってきた。

「はい、これ天宮君の分の着替えよ」

そう言うと、大きな袋の片方を渡された。

中にはコスプレ……らしき衣装が二着ほどと下着類が入っている。

「こ、これ着るんですか……？」

俺は否定してくれ。と願いを込め椿に問いかける。

「……そ、そうよ」

顔を赤らめ、椿は肯定する。……ああ、ここでもまた覚悟しなくちゃってやつだな。まさかコスプレする日が来るなんて考えたこともなかった。

俺は先に洗濯物を全自動洗濯機に詰め込み、椿はもう一度シャワーを浴びに行った。

俺はパンツとシャツという情けない格好で椿がシャワーから出てくるのを待っていた。

二十分ほどすると、椿はチャイナドレス姿で出てきた。これってカジノとか用か？ まあ……ナイス。スリットから見える椿のすらっと伸びた白い足がとてもエロイ感じに……。

「……………ナイス」

親指をびしつと立てた。

「は、恥ずかしいから、あんまりジロジロ見ないでよ。……って、ま、まだそんな格好でいるの!？」

俺の姿を見ると、椿は顔を背ける。

「ぎゃ、逆に普通そんなの着れないんだよ……!」

俺は心の奥底からそう思い叫んだ。コスプレなんて恥ずかしい格

好できるか!!!

「んなっ……私の方が変だって言うの!？」

「間違いなくそうです! 普通着れません!」

そう言う時椿は自分の姿にもう一度視線を向けると数秒固まり、ダイニングの方へ駆けて行ってしまった。

最終的に俺のコスプレ姿を披露することはなかった。洗濯が終わるまで情けない姿で椿とは別々の部屋で過ごした。
乗り切った……。

4 学校

服も洗濯が終わり、元の制服姿になったところで学校から帰ってきたのであろうリコが部屋を訪れた。

「ただいま」

「ここが私の部屋。という感じで帰ってきた。なぜか両手には大きな鞆を持っている。」

「……ああ、おかえり」

椿も洋室から小走りで行ってくる。

「おかえりなさい。リコさん」

椿は何も疑問を抱いていないようだったので、俺が質問を試みる。もうなんとなく予想つくけど、当たっていると俺どうして良いか分からなくなるし……うん、も、もちろん俺の寝るところが無くなるって意味なんだから！

「リコさん - -」

「リコ様」

聞き間違いかと思ってもう一度仕切りなおす。

「え？ リコさん - -」

「リコ様」

「……。」

「リコ様？」

「何？」

「可愛らしく首を傾げた。ま、まあ良いや。」

「その大きな鞆どうしたんだ？」

「……着替えとか？」

「つまり？」

「そこまで言っていると椿は理解したようだ。」

「駄目よ！ リコちゃん。ここにはこの男がいるから！」

「大丈夫。動いたら動けなくなる」

そう言うつとリコはスカートの腰のホルダーから銃を取り出し、俺に向ける。

「んな！ 動いただけで！？ 俺間違いない今日だけで蜂の巣になる自信あるぞ！？」

とまあ、そんな訳でリコ様もこの部屋に住むことになりました。とき。理由？ 夕食の時、ヤンキーが言うには「言っただろ？ 部屋数節約だ。お前等行動一緒にすんだから逆に便利だろーが」とか怒られた。もう意味が分からない。いや理由は分かる。でも決めるのが早すぎるんだよ！ 学生の男と女を同じ部屋にする大人がいた事が地味に驚きだよ！ そんなこんなでリコ様も同じ部屋に寝泊りをすることに。

リコは椿と同じベッドに寝ることになり。（俺が危ないらしく椿が半ば無理やり決めていた）俺はダイニングにあるソファで寝ることになった。

食堂で三人で夕飯を食べ、リコ、椿、俺の順で風呂に入り明日に備えて早めに寝ることに。……風呂でのイベント？……ねえよ！ んなの！ イベント起こる前に蜂の巣フラグに変わっちまうから！

朝起き、朝食を食べるとすぐに学校へ行く準備をした。

新しい制服を受け取り着替える。スクールバックには何も入れる物がなかったたので空っぽの状態で持っていくことに。

「そっいえば、リコ様」

「……椿。陸が壊れた」

リコは変な奴を見る目で俺を見てくる。

「壊れてねえよ！ あんたが言ったんだよ！ リコ様って呼べってな！」

「もうそんな事いいから天宮君、朝からうるさいよ！」

「陸はうるさいから嫌い」

「んなっ……」

男子高校生の俺は心に深い傷を負ったので黙りこんだ。

ペンションがある森をさらに5分ほど進むと今までであった美しい木々がなくなり、あたりはアスファルトの道路が広がっていた。道路の脇にはビルやお店やらが立ち並んでいる。道路には車は一切なく自転車が数台道路を走っていた。

「わぁ……全然風景が今までと違うわね……」

椿はきよろきよろと辺りを見回しながら言う。

「木とか草しか見てなかったからなんか新鮮だな」

「すぐ慣れる」

それだけ言うとりコは歩き始める。

学校はその道路を直線に5分ほど歩くと見えてきた。

正面に校門。校門の後ろには大きな校舎が見える。予想では奇抜な形をしているのじゃないか？ とか思っていたがどこにでもある普通の三階建ての校舎のようだった。

学校の敷地内に入るとあちこちに同じ制服を着た生徒が30人以上いた。こんな得体の知れない所にいるというのに暢気そうにジャージ姿でサッカーボールを持っている奴までいる。俺はそれを見て軽くため息をついた。

生徒玄関で適当な靴箱に三人は靴を入れ、ダンボールの中に入っていたスリッパを履く。

「んで、リコさん俺達の教室はどこなんだ？」

昨日リコは同じクラスになるだろう。と言ってたのを覚えている

のにあえて質問してみる。緊張を少しでも解そうと試みたのだ。

「へえ……緊張してるのね」

椿が意地悪そうな笑みを浮かべている。

「だ、断じて違う！」

「椿もさつきから深呼吸してる」

俺は椿の前を歩いていたので全然気が付かなかった……いやリコも前を歩いていたはずんだけど……。

「ち、違うわよ！ 天宮君、な、何よ？ 自分に渴入れていただけなんだから！」

ジト目を向ける俺に対してこのツン……萌える……。

俺達の教室は三階にあった。一年三組。普通すぎてなんだか現実のような気がする。

学年は年齢制限などはない。この世界に来てこの学校に入る時は皆一年生からのスタートとなる。らしい。つまり、リコもこの世界に来て一年も経っていないのだろう。

教室に入ると俺と同じくらいの年齢の奴や小学生くらいの子供、30を超えてそうな人までいる。教室には机とイスのセットが敷き詰められていて、あまり余分なスペースがないほどだ。黒板には日直やお知らせなどが書いてある。

リコに促され廊下側の前から二列目の席に俺と椿が隣同士で座り、その前にリコが座った。

「誰にも気が付かれないんだな……」

「さみしいの？」

リコが首を傾げて可愛らしく質問する。

「寂しいってどうか……拍子抜けだなあ……と」

「そうね。私ももう少し注目されるものだとばかり……」

「ここでは結構普通の事だから。……でも、後で自己紹介する時は目立つから」

リコはそう言う短い金髪を揺らし、机の上に突っ伏す。

俺と椿も何気ない会話をしているとすぐにチャイムが鳴った。

「春海 椿と申します。皆さんよろしくお願ひします」

椿の自己紹介が終わり、男子の歓声と共に拍手が沸きあがる。さすが椿さん……一見ただけで男子共を悩殺されましたか。

次は俺の番だ。俺の場合は女子からの歓声が湧きあがるに違いないとかフラグを立たせながら自己紹介を始める。

「今日から皆さんと同じクラスメイトとなる……」

もうすでにこの時点で歓声が凄すぎる。

「天宮 陸と申します……。よ、よろしくお願ひします」

「椿ちゃんトリコちゃんと同じギルドだからって調子に乗んな！とか「男はいらねんだよ！」とか「二人に近づくな！」とか「死ぬ！」とか……もう最後の言葉にいたってはなんで言われたのかさえ理解不能。

俺は切れた。格好悪いところを見せたくないと思つてしまった。

「てめえら！ 良く覚えておけよ！？ ……二人は俺のもんだ！ 手を出したら手加減なく潰す！」

俺はやけになつて独り占め宣言をしたのであつた。益々男共の罵詈雑言が聞こえてきたが俺は華麗にスルーしていた。……頭が真っ白になつて理解できていなかったのだが……。

椿は隣で顔を真っ赤にし口をぱくぱくしている。リコは興味なさそうに欠伸をしていた。

そして、戦士であろう服装をした教師師に促され席へと戻る。

椿が前を進んでいる時は足なんて無かつたと思うのだが……俺が歩く道にはなぜか多くの足が俺の脛を目掛けて飛んできていた。

席に腰を下ろすと、椿に小声をかけられた。

「天宮君っ！ ああいう事言うのは……二人の時だけにしてよねっ」

「あ、え、ええ！？」

俺は驚きすぎて情けない声を出した。

「な、何よ？ そんなに驚くことないじゃない……」
しょんぼりと肩を落としていく。

「い、いや嬉しすぎて少し驚きすぎた」
椿は「ま、まあそういうことだから！」と言うつとそっぽを向いてしまった。

そんな時後ろから声をかけれた。……これがきゃぴきゃぴの女の子の声だったら誰もが振り向くけどさ、ドスのきいた男の声だったらほとんどの人は振り向かないんじゃないかな……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5806t/>

クソつまらないプライドと共に生きていく！

2011年5月30日21時55分発行